

史料紹介と研究

近世北野社の一視角
—「洛外名所図屏風 北川家本」の紹介—

西山 剛

はじめに

本稿は江戸時代前期に成立したと考えられる「洛外名所図屏風 北川家本」（個人蔵、以下「北川家本」と表記）を紹介し、その描写が意味することについて若干の考察を加えるものである。「北川家本」は、京都文化博物館特別展「北野天満宮 信仰と名宝」（二〇一九年二月二十三日～四月十四日）にて初公開された作品であり、後述するように近世北野社を考える上で示唆に富む描写を多く持ち、また当該期における名所風俗図の展開過程を考える上でも重要な作例といえる。しかしながら展覧会図録においては紙幅の都合もあり、図版を交えて十分な解説を施すことができなかった。このような状況に鑑み、本稿では、あらためて「北川家本」の基礎情報をおさえながら、文献史料や他の絵画史料も用いてその特徴について再考したい。

一、基礎情報と各名所図

【時代】 十七世紀前半 【技法】 紙本着色

【法量】 縦一四七・〇浬 横三九八・〇浬 【員数】 六曲一隻

まず本作の全体図を掲げ、描かれた諸所を見ていきたい（図1・図2）。主要な建造物を第一扇から順に列挙していくと、金閣寺・大徳寺・龍安寺・北野社・嵯峨釈迦堂・広隆寺・北野経王堂・虚空蔵（法輪寺）・壬生寺となる。これらの寺社は、京の西郊地域に所在する寺院であり、ちょうど洛中洛外図屏風では左隻の名所として採用される傾向にある寺社群といえる。

実は、この「北川家本」と元は一双をなしていたと考えられる作品が既に紹介されている。一九九四年、京都国立博物館で行われた展覧会『都の形象 洛中・洛外の世界』に出品された「洛中洛外図」（六曲一隻、作品番号二三、以下、「洛中洛外図 京博出品本」と表記）がそれである。本展に際しては、五十一点もの作品を全図および二扇ずつの分割図をもって紹介した大部分な図録も刊行されており、当該作品に関しても良質な図版が提供されている^{〔1〕}。これを見ずると、金雲の形状、地面に銀砂子を用いる技法、小顔長身の人体表現など、当該作品と「北川家本」は描法の上でいくつもの共通点があり、一具の作品であるとする見解は首肯できる。

ここに描かれた豊国神社・三十三間堂・方広寺・清水寺・八坂の塔（法観寺）・四条河原の芝居興行・祇園社など東山の名所の数々は、洛中洛外図屏風の右隻における鴨東の名所として採用される地点である。つまり、「北川家本」とこの「洛中洛外図 京博出品本」は、近世に至って盛んに製作された洛外名所図屏風のうちのひとつであると捉えることができる。また作者に関しては「洛中洛外図屏風」（林原美術館所蔵、以下「林原本」）系統の作者・工房が想定されており、それを裏付けるように「北川家本」「洛中洛外図 京博出品本」に採用された建造物や画面全体にたなびく金雲などは、「林原本」との親近性が認められる。

しかしながら、「北川家本」「洛中洛外図 京博出品本」には他の類似作例とは異なる特徴的な創意点が見られる。右隻にあたる「洛中洛外図 京博出品本」においては芝居興行、左隻にあたる「北川家本」においては北野社にとりわけ意識が払われ、他の名所とは比較にならないほど大きく取り扱われているところだ。後者では四扇にわたって極大に北野社頭が描かれており、あたかも北野社頭図屏風の様でもある。それでは、ここに描かれた北野社にはいかなる特徴があるのだろうか。

二、描かれた北野社とその特徴

社頭の絵馬

近世における名所風俗図の展開の中で、一定程度の群をなすメディアが北野

社頭図屏風である。これは北野社の社殿を中心に据え、周囲に展開する諸人参詣の姿や遊興の様子を一体的に捉え、画面構成を図った作品群の総称である。多くは屏風絵であり、左右一対が揃う作例では、祇園社・方広寺・清水寺など東山の各名所を描いた隻と取り合わされる場合が多い。画面を構成する諸要素も定型性が高く、その要素は、社殿・馬場・影向の松・経王堂の四つに大別される⁽³⁾。「北川家本」で極大に捉えられた北野社もこれら四つの要素が配置されており、本図は北野社頭図の性質が濃厚に含まれていると判断することができる。

具体的に見ていきたい。北野社の社殿をみると廻廊が取り付けられている。これは、慶長十二年（一六〇七）に実施された豊臣秀頼の大改修によって整備されたものであり、景観年代はそれ以後とおさえることができる⁽⁴⁾。この年代は、絵画様式の検討から導き出せる制作時期の時代観と齟齬はない。

さらに「北川家本」の景観・成立年代を考えると、看過できない描写がある。社頭に描かれた絵馬がそれだ。二人の人物が社殿の方角に牛が描かれた絵馬を運んでいる。元禄十三年（一七〇〇）に絵馬掛所ができるまで絵馬は社殿内部の内陣に掲げられていたことを勘案すれば⁽⁵⁾、この描写を絵馬の奉納行為であると見做すことができよう（図3）。親近性の高い林原本系統の洛中洛外図においても、同様に絵馬を運ぶ描写は散見されるが、本作の絵馬には「寛永三年」（一六二六）と年紀が記されていることが重要である⁽⁶⁾。北野社は十七世紀からの百年間、慶長期・寛文期・元禄期と三度にわたって改修・修復が行われ、その都度、境内の景観が変更された。「寛永三年」というこの年紀は、めまぐるしく変更された近世前期における北野社の空間を適切に読み取っていくための重要な指標となるものである。

社頭の空間

当該期の社頭空間を考えると、参考になる史料が、元禄十三年（一七〇〇）に成立した「北野天満宮社堂絵図 控」（図4）である。社殿改修に合わせて製作された本図は、社内外の建物等を全て平面図として捉えたもので、全面には一・八輝幅の方形線が白界で表される。建物は柱間を墨点で示し、屋根に用いられる材の種別までが明示されており極めて詳細な情報が記

載されている。本史料は北野天満宮の近世における信仰空間を考える上で極めて有効なものであるといえる⁽⁷⁾。いまここで本史料と「北川家本」を対照させ、その比定図を提示する（図5）。

先述したように、「北川家本」の北野社周辺の描写は、本殿空間とその下に続く馬場、さらに影向の松と北野経王堂が捉えられており、北野社の風景・風俗を個別的に切り取った北野社頭図屏風と類似する構成を持つ。社頭における個別の建造物に対する目配りも効いており、鐘楼（C）・法華堂（I）・多宝塔（L）・輪藏（N）などの諸施設は、神仏集合思想が未だ濃密に社頭に横溢していた段階の様子をよく伝えている。また輪藏の上部に一夜松宮（J）が、祠前に座し掌を合わせる女性とともに配置されることも注目される。天神が右近の馬場に祀られるにあたり、一夜にして千本の松が生じたという神話が示すように⁽⁸⁾、松は、北野の地に天神を結びつけた聖なる樹木なのである。当該描写は北野社成立神話に関する信仰施設を的確に把握しているものといえよう。

また、さらに着目したいのは、御供所（A）である。築地塀をめぐらせ棟門を備える瓦葺きの建造物として描かれ、北野社の社頭にありながらも一定の区別をうけた空間として捉えられている⁽⁹⁾。実はこの建物は、神饌を調達する機能をもった八嶋屋とも称される施設であった（以下、御供所を八嶋屋と表記⁽¹⁰⁾）。当該施設に関しては、中世後期を中心に既に高橋大樹によって詳細に検討され、その内部組織や御供調進の実態について実証的に明らかにされている⁽¹¹⁾。以下、その要点を列挙すると次のようなものである。

- ・ 八嶋屋は、八嶋職に補任される巫女・宮仕、その差配を受ける沙汰承事や公文承事によって組織されていた。
- ・ 北野社膝下領・西京から貢納される神供・御供は八嶋屋で調進され、本殿・摂末社等に供えられ、さらに門跡や政所をはじめ各人へ分配されていた。
- ・ 西京から御供貢納が滞った場合、八嶋屋は独自に文書を発し、訴訟の主体となった。



图2 「北川家本」比定图

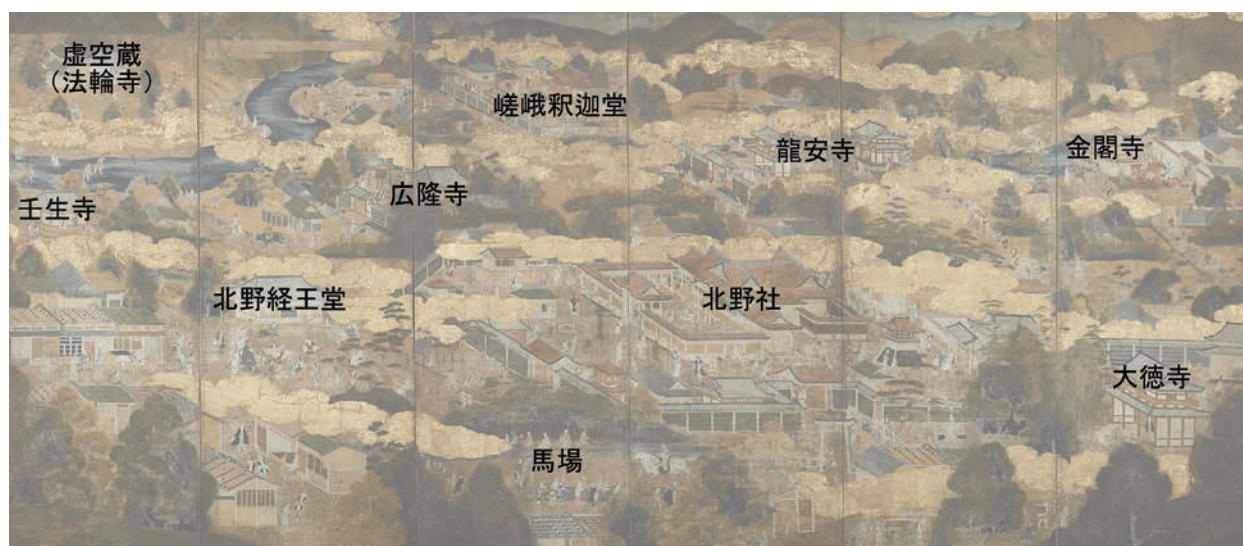




図1 「洛外名所図屏風 北川家本」(個人蔵)全体

図3 「北川家本」における寛永三年絵馬奉納(第四扇中)



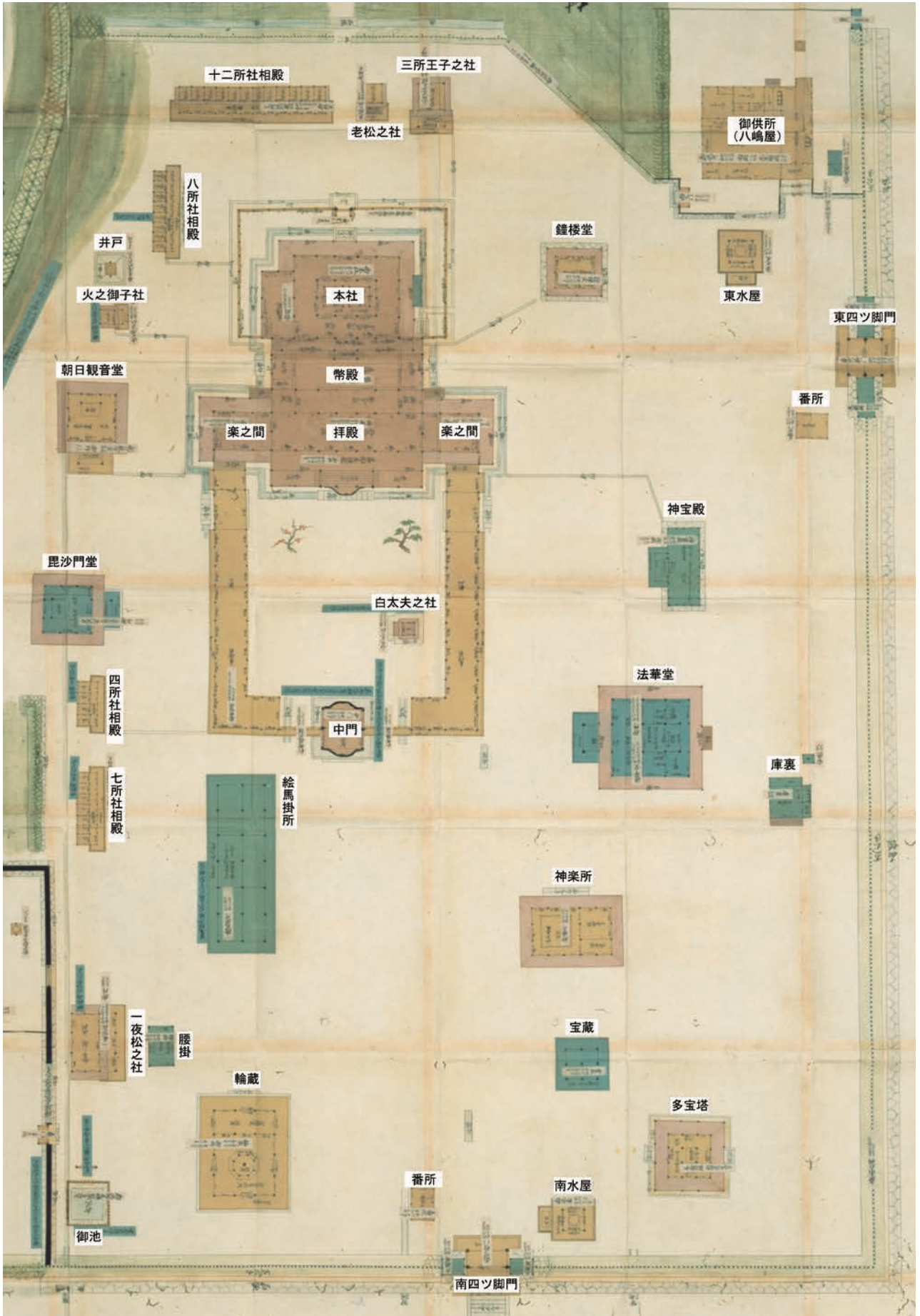
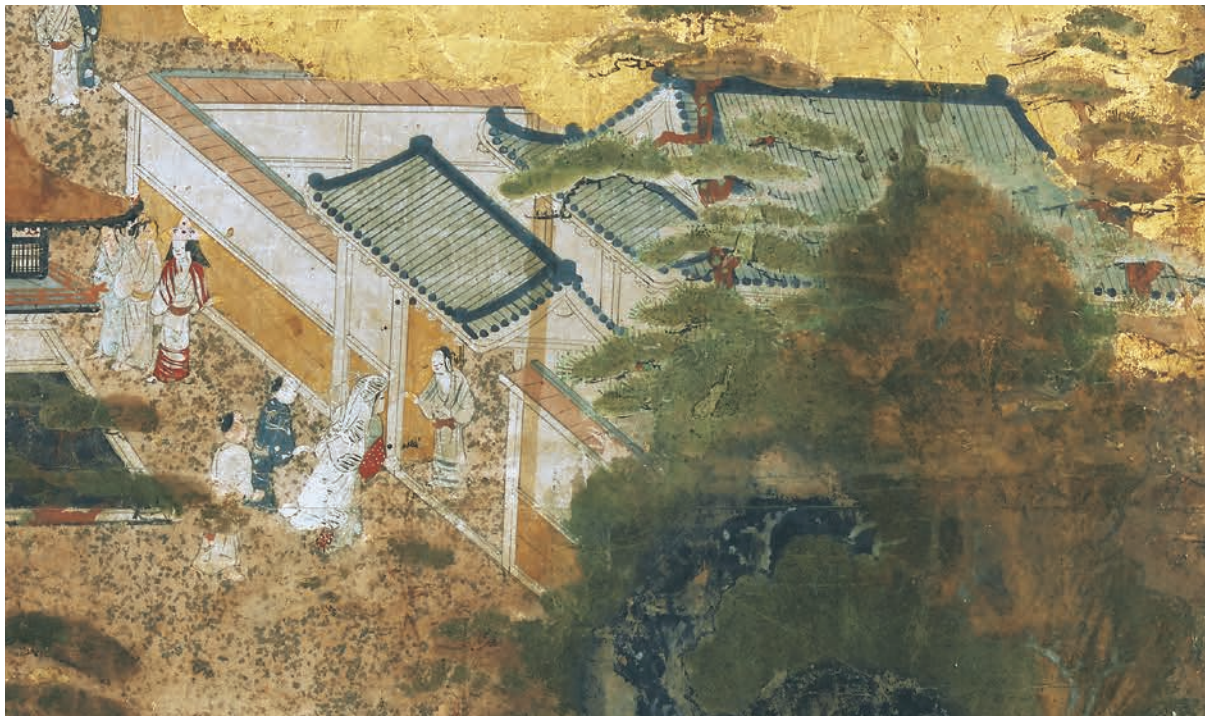


図4 「北野天満宮社堂総絵図 控」(北野天満宮蔵)部分 絵図の書入に従い諸施設の名称を示した。



図5 「北川家本」部分 北野社頭比定

図6 「北川家本」における八嶋屋（第二扇中）



これらのことを踏まえ、氏はこの八嶋屋が単なる御供調進の場ではなく、北野社における仏神事・年中行事を支え維持するための重要な空間であり、同時に門跡・社家とも一定の距離を置きつつ、宮仕が座成をして活動する北野社組織の要の場であったと指摘した。

この点を踏まえ、「北川家本」における八嶋屋の描写に着目すると、建物と同時に参詣者と思しき被衣姿の女性と、それを応対するもう一人の女性が描かれていることに気づく(図6)。後者の女性は建物の内側から相手に接しており、被衣姿でもない。八嶋職が代々巫女の重職であったことを勘案すれば、まさにこの女性こそがそれにあたるものと考えられよう。

神仏習合や北野社成立伝承に関する重要な信仰施設の数々、さらに八嶋屋のような社内内の要所、「北川家本」に配されたこれらの描写は、実は本作と親近性の高い林原本系統の諸作品にしばしば描かれるものでもある。しかしながらここで確認しておきたいのは、「北川家本」においては、その諸施設の中で息づく組織や人間の姿に光があてられている、ということである。だからこそ本作は、近世北野社の実態を考える上で、極めて着目される絵画史料といえるのである。

三、経王堂前の相撲

今ひとつ、北野社周辺の描写で考えておかなければならない部分がある。北野経王堂(P)とその前に広がる相撲の風景である(表紙掲載図)。

経王堂は、明徳の乱で敗れた山名氏やその手勢の

霊を慰めるために足利義満がはじめた万部経会の施設として十五世紀前半に右近の馬場に建立された。毎年十月七日から十日間にわたり行われた万部経会は、千人の経僧によって一万部の法華経が読誦され、北野万部経会として多くの人々をこの地に誘引し、北野社周辺地域が都市的な展開を遂げる上で重要な役割を果たしたが、応仁文明の乱を境に中断した。経王堂自体も寛文九年（一六六九）から十年に小規模化し、明治三年（一八七〇）に廃寺とされた。このような経緯を持つ経王堂であるが、「北川家本」が描かれた十七世紀の段階ではまだ十全にその機能を果たし、修理が加えられながら、限定的ではあるが万部経会も復興されたことを確認できる。

さらに経王堂周辺地域では多様な芸能がさかんに行われていた事実も見過すことはできない。近年、芸能の場としての北野社に関する研究は蓄積を見せており、豊富な成果があがっている。中でも三枝暁子⁽¹⁴⁾、野地秀俊⁽¹⁵⁾らの研究は、室町時代から江戸時代中期の経王堂前空間（下之森地域も含む）における多様な芸能を網羅的に検出しており重要である。あやつり物・幸若舞・曲馬・傀儡・剣舞・人形浄瑠璃・歌舞伎・見世物・辻能など、中近世の経王堂周辺は、多くの芸能民が集い、それを目当てに人々が群参する、にぎやかな遊興空間であったことがわかる。

しかし、これだけ様々な芸能がもたれたにも関わらず、実は相撲の開催を伝える事例は極めて少ない。中世では、唯一延徳二年（一四九〇）七月十六日に馬場において相撲が予定されたが、実際は開催されなかった事例を検出するに止まる。むしろ「馬場相撲取由在^レ之間、以^レ公人^二不可^レ叶由申付也^⑥」というごくごく短い記事からは、右近の馬場における相撲が公人（幕府公人カ）によって停止される種の催しであった、ということが読み取れる。この後、確実に相撲の開催を伝える史料を求めると、享保十二年（一七二七）鳴滝村橋修復の勧進相撲の事例にまで下がらなければならない。北野社頭図や洛中洛外図屏風などの同種・近親の絵画史料においても、経王堂前で相撲をとっている描写は極めて少ない⁽¹⁶⁾。どうやら「北川家本」の相撲の描写は、実態的な景観描写ではないと判断できそうである。かつての右隻であつ

た「洛中洛外図 京博出品本」の第一扇中、三十三間堂のあたりで相撲が配置されていることを考えれば、絵師が遊樂の風景を表すための常套表現ととらえることも、あるいは可能かもしれない。

しかしながら、今ここで想起せねばならないのは、北野社が所在する右近の馬場という地域と相撲との関わりである。千本英史は、当該地域の特性を考察する中で、惟喬・惟仁親王の位争伝承に着目し、その伝承が普及していくにつれ、位争としての相撲・競馬の現場が右近の馬場に通念されていたことを指摘した⁽¹⁷⁾。

関わりはそれだけに留まらない。毎年八月四日を式日として行われていた北野祭礼で相撲は欠かすことのできない催事であったのだ。その様子は、各種の縁起にも記され、たとえば『北野天神縁起 建保本』には次のようにある。

法会行道のおほりに左右のすまひのかりやに、左右近の庁頭、おのおの我方のすまひども、いかに、と、とおきてまわしたるこそ面白は侍れ、雑人のなかより、うらてのすまひの方々には、いにしへの勝村か末柴⁽¹⁸⁾しまのやうなる気色にて、やうやくねりいでたり、かたへよりは氏長がたぐひなるべし、ともに取物をさしおき、たちあひて手あはせするほとこそゆ、しくはみへけれ、見物のために参り集りたる道俗男女、おひたるもわかきも五躰遍身よりあせをなかさすと云ことなし、雌雄を決するほとぞ、なか、目もあやなり、第一の仁親これにしかすとそうけたまわり侍る⁽²⁰⁾、

「左右近の庁頭」が、それぞれ「すま^(相撲共)いとも」を参らせ取り組みをさせる様と、それを見物する「道俗男女」が中心的な情景として叙述されている。また「見物のためにまいりあつたりたる道俗男女おいたるもわかきも五躰遍身よりあせをなかさすといふことなし」という描写からは、相撲がもたれる空間をとりまいて民衆が集い、熱狂的にそれを眺める姿を読み取ることができ、臨場感あふれる取組の様子を伝えている。後にこの言説はいわゆる甲類系統の縁起絵巻に採用され絵画化されていくこととなった。

ここに記される「左右近の庁頭」とは、左右近衛府に所属する庁頭を指

し、院政期より府務運営を担う実務官人として諸史料に姿をあらわす。左近守頭には、大石氏が、右近守頭には惟宗氏がそれぞれ世襲的に補任されたことが実証されているが、重要なのは彼らの役務の中に、相撲使として相撲人に関する所管任務があったことだ。彼らは、行事運営を行うための関連文書の送受や集積も行っていったようで、承元元年（一一〇七）七月八日、右近守頭惟宗久景が藤原定家のもとに相撲人選定に関する左近衛府牒をもたらしており、その中には八月五日の分として「北野宮御会相撲役」という文言も見られる。²²⁾

つまり、既に鎌倉初期においては、右近守頭が相撲と密接に結びつき、相撲の拠点として北野祭礼が位置づいていたのである。北野祭礼は応仁文明の乱によって途絶し長く再興がなされず、祭礼の中で行われる相撲もやはり同じように停止したが、相撲の場という地域の記憶は右近の馬場に残存し続け、受け継がれていったと考えられる。「北川家本」の相撲描写はまさにこのような状況の中で積極的に絵師に選ばれ、描かれたものと考えたい。

おわりに

かつて一雙を成していた作例とあわせて「北川家本」をとらえてみると、この一雙は洛中洛外図から都市の要素を脱落させ、鴨東・西郊の名所をとりあわせた、洛外名所図屏風の様相を呈し、その作者も「林原本」を生み出した工房周辺だと考えられる。しかしながら既述のように、それぞれの隻は一方では四条河原の芝居の様子、また一方では北野社の割合を大きく強調して画面構成を行なっている。

とくに左隻にあたる「北川家本」の北野社の描写は極めて特徴的であった。多宝塔・輪藏・鐘楼などの仏教的施設を描き、神仏習合の段階にある社頭の景観をおさえた上で、一夜松宮という天神縁起に由来する信仰施設にも目配りをしていた。また、仏神事・年中行事を支え維持するための重要な空間である八嶋屋を、ここを拠点に活動を行う巫女も含めて描写していた。林原本系統で採用されるモチーフに対しさらに接近し、そこに息づく人々の動

きをもあわせて捉えようとしたところにこそ「北川家本」のオリジナリティが認められる。

さらに経王堂の前に実態から離れた異例ともいえる相撲の様子を配し、かつて右近の馬場や北野社にあった地域の記憶をも取り込んでいる。このことは作者、あるいは屏風の構想者は、北野社とその周辺地域に愛着を持ち、深く地域性を理解した工房ないし人物であると推察することが可能であろう。

北野社は、京都の寺社の中でも絵巻・扇面・屏風など様々なメディアで絵画化された神社である。中世より多様に流布した北野社のイメージを用いることで、近世段階ではあるべき北野社の姿を自由度高く構想することが可能となった。一群の北野社頭図というジャンルが近世初頭から成立してきていることは、このことと深く関わるものと考えられる。²³⁾しかし、これはある面では実際の景観から乖離した画面構成を生み出す可能性を秘めており、絵画史料として当該作品群や各種都市風俗画の北野社の描写を用いていく上で、注意しなければならぬ点である。しかし、北野社が帯する歴史的事実を仔細に検討し、個別描写と比較を行うことにより、その作品に宿る史料性を引き出すことは十分可能であると考えられる。「北川家本」はまさにそのような類の作品であり、近世北野社の環境を考える上で、重要な作例と位置付けることができる。

近世都市図を歴史的に検討する研究は近年とくに盛んになってきている。²⁴⁾図版の上とはいえ、「北川家本」の紹介で両隻の図像が明らかになった今、ようやく全体的な作品論を展開する素地が整った。この紹介の後、近世都市図研究の諸成果と結び合いながらさらなる研究の深化が期待される。

注

(1) 京都国立博物館編『洛中洛外図屏風 都の形象 洛中洛外の世界』（淡交社、一九九七）。なお当該展覧会には『都の形象 洛中・洛外の世界』（京都国立博物館、一九九四）という書名の図録が存在する。九七年出版本は、九四年出版本の拡充・再構成版であり、両者は作品番号が異なる。本稿では、図版・解説がより行き届いた九七年出版本を参照しながら行論することとする。

(2) 展覧会を担当した狩野博幸は出品された「洛中洛外図 京博出品本」について次のように解説する。

描かれた人物の特徴ある顔貌表現によって、本図が池田本を製作した工房と直接の関係のあることが知られる。中央の四条河原にひととき大きく描かれているのは能舞台、演目は「葵の上」とされる。景観年代は、従来、寛永期それも初頭と推定されていたが、近時、本図と対をなすと考えられる左隻が報告され、北野社に奉納される絵馬に寛永三年（一六二六）と書かれている。このうち「近時、本図と対をなすと考えられる左隻」が「北川家本」にあたるが、展覧会への出品はなく、画像の提示もなされなかった。

(3) 西山剛「歴史史料としての北野社頭図屏風」(京都文化博物館編『北野天満宮信仰と名宝』、思文閣出版、二〇一九)。

(4) 北野社殿の廻廊は、至徳三年（一三八六）に成立した「神輿中門廻廊等造替記録」(『北野天満宮史料 古記録』所収)という史料が残されていることから南北朝時代には存在したことが明らかとなる。しかしながら、「北野曼荼羅」(北野天満宮蔵)や各種の初期洛中洛外図屏風における北野社社殿には廻廊が備わっておらず、十五・十六世紀には失われていたものと考えられる。絵画史料の中で北野社社殿の廻廊の有無が時代を判別する上で重要な指標となるのはこのような事情による。

(5) 「元禄十四年遷宮記」(『北野天満宮史料 遷宮記録一』所収)

(6) 画面の中に年紀が入られた類例として「洛中洛外図屏風」(佐渡・妙法寺蔵)が挙げられる(前掲注1書・作品番号一八参照)。左隻四扇中央の店棚に配置された大福帳に「元和七年正月吉日」と記される。

(7) この図面と別に、さらに古い時代の北野社の全体像を把握した指図が存在する。学僧・宗淵が編纂した天神信仰史料集『北野藁草 図書』四巻に掲載された「慶長御再興指図 縮写」である。本図は、二次史料ながら秀頼の社殿改修直後の北野社の姿を描いたもので、同じように建造物は柱間の描き込みもなされて詳細である。

(8) 「北野天神御託宣記文」(『神道大系 神社篇 北野』所収)。

(9) 前掲注7で引用した慶長段階の絵図では、御供所(八嶋屋)は本社のおすぐ東に配置され、比較的簡素な建物として捉えられている。この様子は、十六世紀に成立した「洛中洛外図屏風 歴博甲本」(国立歴史民俗博物館蔵)や「北野曼荼羅」のそれと近く、むしろ中世段階の姿を伝えている感もあるが、本文で引用した「北野天満宮社堂総絵図 控」の表現とは大きく異なっていることがわかる。慶長絵図の段階から元禄絵図の段階に至るとどこかのタイミングで八嶋屋が北側へ移設・拡張されたと考えられることもできようが、そう単純ではない。

狩野光信(一五六五?—一六〇八)が描いたとされる「洛中洛外図屏風 旧山岡家本」(京都国立博物館蔵)に記載された北野社をみると、既に八嶋屋には築地

塀が備わり、社殿の北西に配置され、元禄絵図のものと近いのだ。作者の没年を考えると、慶長十二年(一六〇七)の大改修の段階で、拡充された姿でなければ整合的でない、ということになる。

この矛盾を解決していくには、慶長絵図を検討する一方、「山岡家本」の成立年代もあわせて検証していく必要がある。

(10) 林原本系統に属す「洛中洛外図屏風」(前掲注1図録作品番号一六)では、八嶋屋から御供を運ぶ社僧が三人描かれている。本系統は、北野社の内部施設に対してよく目配りをした作品が多い。

(11) 高橋大樹「中世北野社御供所八嶋屋と西京」(日次記事研究会編『年中行事論叢』、岩田書院、二〇一〇)。

(12) 『言経卿記』慶長八年正月二十四日条。

(13) 『鹿苑日録』慶長十一年八月二十五日条。また北野万部経会をおった研究としては梅澤亜希子「室町時代の北野万部経会」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第八号、二〇〇一)がある。

(14) 三枝暁子「近世における北野社門前の社会構造」(鈴木則子編『歴史における周縁と共生』、思文閣出版、二〇一四)。

(15) 野地秀俊「北野の馬場と経堂」(瀬田勝哉編『変貌する北野天満宮』、平凡社、二〇一五)。

(16) 『北野社家日記』延徳二年七月十六日条。

(17) 三枝前掲注14論文中付表「興行申請一覧」。

(18) 管見のかぎり、十七世紀前期から中期と考えられる「洛中洛外図屏風 歴博D本」(国立歴史民俗博物館蔵)の経王堂の前では、唯一相撲を取る人々とそれを観る観客を配置している。

(19) 千本英史「右近馬場の地政学」(『日本史研究』三六四号、一九九二)。

(20) 「北野文叢」第十五(『北野誌 地編』所収、国学院大学出版部、一九一〇)。

(21) 齋藤拓海「院政期から鎌倉初期の近衛庁頭とその職掌」(『史学研究』第二七四号、二〇一一)。

(22) 『明月記』承元元年七月八日条。

(23) 前掲注3論文。

(24) この点に関し、西山剛「近世における洛中洛外図屏風の変容」(杉森哲也編『シリーズ三都 京都巻』東京大学出版会、二〇一九)では一定の整理を試みた。

【付記】本稿は、画像史料解析センター「近世都市図解析」プロジェクトでの共同調査・討議を踏まえ成稿したものである。

(京都文化博物館学芸員／画像史料解析センター共同研究員)